

「問う」という生き方

—ハイデガー「テクネー論」を3・11以後に読み直す—

Fragen, das ist Leben.

鎌 田 学
Manabu KAMATA

はじめに

2011年3月11日の東日本大地震による福島第一原発事故は、我々に改めて原発という「技術とは何であるか」についての問いを突き付けた。またこの問いは、「技術と我々とのかかわり」の問い直しも求めている。¹

3・11以降、各方面から様々な言論が日本で飛び交っているが、その多くは政策的あるいは科学者倫理レヴェルのもののように思われる。より根本からそれらの問題を考えようとするなら、「技術の本質」について論じたハイデガーの著作「技術への問い」(1954年)を避けては通れまい。²

ハイデガーの基礎的主張を二点、あらかじめ確認しておきたい。

福島第一原発事故をうけて、日本という国がエネルギー政策として原発を計画、建設したことが問題だと主張し、安全な太陽光発電などの自然エネルギーにシフトすべきだと言う人がいる。これは、しかし、原発推進派と根本において何ら変わらない。なぜなら、太陽光発電であれ原発であれ、ともに自然を「挑発する」技術という点において同類だからである。

また第二に、近代以降の技術一般に言えることだが、技術利用にあたっては社会の諸関係・要因を無視することはできないはずである。たとえば、現代の文明社会において人々の生活を快適かつ安全に保つ電気がなければ、普段の生活や産業が成

り立たなくなる以上、発電する技術は当該社会にとって不可欠である。だが、ハイデガーは技術と社会との結合に対して全く注意を払わずに、技術についての誤れる「自存説」を唱えている。こう主張しハイデガーを批判するフィーンバーグのような論者がいる。ところが、この立場は暗々裏に技術を「機具的、人間学的に」³規定しており、ハイデガーによれば、単に「正当」であるにすぎない考えとして却下されてしまう。

ハイデガーのこうした主張をまず踏まえたいうえで、我々にとって最も重要な問題は次の点にあると思われる。すなわち、では一体、「技術に対して人間のどのような態度が求められるのか」である。ハイデガーの表現を借りれば「技術への自由な関係」とはどのようなものとして考えられるだろうか、ということである。

この問題に対して本論は一つの解釈を与えようとする。

1 「問い」の目的

ハイデガーの「技術への問い」の動機は、次の文に端的に表現されている。

「私たちは、技術について問う。そして、そうすることで私たちは、技術への自由な関係を準備したいと思う。」⁴

〈工作人〉としての人間が技術に対して、「自由な関係」をとりむすぶこと、これがハイデガー技術論の動機といえるものである。この点から明らかになるのは、ハイデガーが技術を頭ごなしに否

¹ 「ハイデガー技術論」に対する私の評価は、大震災の前後で大分変わった。大震災はそれほど衝撃を与えた出来事だった。

² ソ連で原子力発電所が、世界で初めて操業を開始したのは1954年。

³ S.6

⁴ S.5

定しているわけでも、それに対して幼稚な反発心を抱いているわけでもないということである。これは、次の文によっても明白である。

「私たちが感情的に技術を肯定するにせよ否定するにせよ、いたるところで私たちは不自由なまま、依然として技術に束縛されている。」⁵

さらに、「自由な関係」の成立条件について、以下のようにハイデガーは言う。

「技術への関係が自由であるのは、この関係が私たち現存在を、技術の本質へとうち開くときである。私たちがこの本質に対応してふさわしく語るならば、技術的なものを、その限界において経験することができる。」⁶

「技術の本質」に照準を合わせて問うことによって、技術ないしは技術的なものの限界画定を行い、自覚的にこれを経験する、これがハイデガー技術論の狙いである。

2 技術—真理論な布置

「技術は目的のための手段である」、「技術は人間の行為である」というような、通常、私たちが技術について持ちあわせる観念を、ハイデガーは「技術の機具的、人間学的規定」と名づける。しかしこの観念は、なるほど「正当」ではあっても、決して技術の「本質」を指示しているわけではない。ハイデガーは、「本質」について語るレヴェルと同じところに「真なるもの」という概念を設定し、技術についての先の規定が不十分である旨、以下のように述べる。

「単に正当なもの (das Richtige) は、まだ真なるもの (das Wahre) ではない。真なるものによって初めて、私たちは、その本質の方から私たちに襲いかかって来るものとの自由なかかわりに達する。したがって、技術についての正当で機具的な規定は、まだ技術の本質を私たちに示していないのである。」⁷

「真なるもの」に問いを定めることは、ハイデガーにおいて、技術を真理論の地平で理解することとして遂行される。ここでは議論の過程は一々

追わない。しかし、重要な三つの論点だけは指摘しておかねばならない。

第一に、アリストテレスの「四原因説」などという「原因 (αἰτία)」を、「現前」と「非現前」の概念を用いてハイデガーが解釈している点。ハイデガーは『饗宴』のなかの一文を引いて、「原因」というものを次のように釈義する。

「非現前するものから現前するものへとつねに移行したり、歩み出たりするものにとってのあらゆる原因は、ποίησιςすなわち、産み出すこと (Her- vor-bringen) である。」⁸

第二に、この「産み出すこと」を、「開披する (Entbergen = 覆いを取り去る)」こととしてのギリシアの真理概念にそくして理解している点。「開披のうちに、あらゆる産み出すことが基づいている。」⁹

第三に、技術は「開披」する一つの仕方とみなされている点。

「τέχνηは、産み出すこと、つまりποίησιςに属している。τέχνηはポイエーシス的なものである。」¹⁰ そうである以上、技術もまた「開披」すなわち、「真理」の一樣態とされる。この点をハイデガーは強調して次のようにいう。

「したがって、τέχνηにとって決定的なことは、作ることや扱うことにあるのでは決してなく、また諸手段を用いるということにもない。それは、先に名づけられた開披することにあるのである。」¹¹

繰り返すまでもなく、技術を単なる手段と考える「技術の機具的、人間学的」な見方は、技術の真理論的なそれへと問題領域を移行された。ハイデガーのこの問題構成は重要である。なぜなら、これを理解しないと、「技術論としては議論が抽象的だ」という類の非難を、やすやすと受け入れてしまうことになるからである。この点については、後にまた第7節で言及したいと思う。

⁵ ibid.

⁶ ibid.

⁷ S.7

⁸ S.11

⁹ S.12

¹⁰ ibid.

¹¹ S.13

3 近代技術の「挑発」

ハイデガーが講演した50年代、手の延長としての道具を巧みに使いこなす、従来型の「手仕事の技術」はもちろん存在していたが、それよりも発電所に代表される複雑で巨大な「原動機技術」の登場が大きな出来事であったにちがいない。ハイデガーの問いも、「手仕事の技術」とは区別される、当時の「原動機技術」に向けられる。問われるのは、近代技術はどのような特徴をもつのか、という点である。

近代技術もまた、それが *τέχνη* である限り、「開披」することではあるが、しかし、それは *ποίησις* の意味における「産み出すこと」ではない。

「近代技術においてはたらいっている開披することは、挑発 (Herausfordern) である。この挑発は、それとして要求され、蓄えられうるようなエネルギーを供給するようという、自然に対する不当な要求を突きつける。」¹²

「挑発」する近代技術に、ハイデガーは前近代の技術に属する「風車」を対置して、次のように言う。「たしかに、風車の羽根は、風のなかを回転する。風車は、吹く風に直接ゆだねられたままである。しかし、風車は気流のエネルギーを蓄えるために、そのエネルギーを開発したりはしない。」¹³

さらに、水力発電所についてのハイデガーの記述をみてみよう。

「水力発電所は、ライン河の流れのなかへと立たされている (gestellt)。この水力発電所は、水圧を供給するように流れを立たせる (stellen)。この水圧は、回転するようにタービンを立たせる。この回転は、電気をつくりだす機械装置を駆り立てる。この電気のために、広域発電所と、電力輸送する供給網とが用立てられている (bestellt)。」¹⁴

水力発電所は、電気を得るために「ライン河の流れ」(自然)を「挑発」する。「挑発」をハイデガーは言いかえて、「立たせる働き (Stellen)」とも表現しているが、近代技術における「開披」のはたらきは、この「立たせる働き」という事態で性格づけられる。

¹² S.14

¹³ ibid.

¹⁴ S.15

もう一点、ここでハイデガー独特の用語に注意しておきたい。「挑発する開披」のはたらきに、いわば襲われ、その対象となるもの(先の例でいえば「ライン河の流れ」等)のありかたを、ハイデガーは、「用象 (Bestand)」と名づけている。

4 「集立」

ハイデガーが近代技術の特徴を、「挑発しつつ開披すること」と捉えていることは、前節で確認した。ここでは、技術を利用する主体について検討する。

常識的な発想では、或る技術を導入し使用するのは人間、社会である。その導入を決定する権限をもつのはあくまで使用主体である人間、社会であり、それら以外にはない。或る技術に安全性が欠けていれば、誰でもその使用を見合わせるだろう。また、或る技術が異常にコスト高であれば、これまたその利用は現実化されない。

しかし、ハイデガーはこうした素朴な常識を覆す。

自然科学の研究対象たる自然が、「用象」として取り扱われる地点にまで追いやられるさまを、彼は以下のように述べる。

「人間が研究し観察しつつ、表象の一領域としての自然を追い立てるならば、人間は開披する一つの仕方によって、すでに呼びかけられている。この開披は、自然が用象という没対象的なものへと消えて行くまで、研究の対象としての自然に取り組むよう人間を挑発するのである。」¹⁵

ポイントは、第一に、自然の探究としての自然科学が、自然を「挑発」する近代技術にすみやかに接続していること、第二に、「開披」が人間を、自然を「用象」として扱うよう「挑発」するということである。これら二つの論点から、「近代技術は単なる人間の行為ではない」が帰結する。技術の使用主体であるはずの人間自身が、「挑発」されているという点において、「近代技術は単なる人間の行為ではない」のである。

自然を「挑発」する近代技術は、自然を「挑発」するように人間を「挑発」する、この点を再

¹⁵ S.18

度以下の文によって確認したい。

「それゆえ、私たちはまた、現実的なものを用象として用立てるように人間を立てるかの挑発を、それが現れるがままに受け取らなければならない。かの挑発は、人間を、用立てることの内へと取り集める。この取り集めるものは、現実的なものを用象として用立てることへ、人間を集中する。」¹⁶

この「取り集めるもの」、より正確に言えば「己れを開披するものを用象として用立てるように人間を取り集める、挑発する呼び求め」を、ハイデガーは周知のごとく「集立 (Ge-stell)」と名づける。

「集立は、かの立てることを取り集めるものである。この取り集めるものは、用立てるという仕方、現実的なものを用象として開披するよう人間を立てる。」¹⁷

ハイデガーはここで、近代技術の「本質」において統べる「集立」という「開披」の仕方を指示したわけである。

5 「危険」と「救うもの」

「集立」が人間を、現実的なものを「用象」として「開披」するようもたらず、すなわち、人間をそうした「開披」へと送り届ける。この送り届けるはたらきをハイデガーは「歴運 (Geschick)」と呼んで、次のように言う。

「集立は、用立てることへの挑発としての開披のひとつの仕方へと、(人間を) 送り出す。集立は、開披のあらゆる仕方と同様、歴運のひとつの送り (Schickung) である。」¹⁸

さて、ここで先に確認した、ハイデガーの真理論的な問題構成を想起しなければならない。「集立」は「開披 (=真理)」のひとつの「歴運」ではあるが、さらに次のように性格づけられている。

「用立てる開披が支配しているところでは、それは開披のあらゆる他の可能性を追い払ってしまう。とりわけ、集立はποίησιςという意味での、現前するものを現出へともたらず、かの開披を秘

匿する。」¹⁹

いま注意すべきは、「集立」は確かに「歴運」であるが、しかし、「名づけられた意味での歴運は、産み出すこと、つまり、ποίησιςでもある」という点である。「集立」というひとつの「開披」が、より根源的な「開披」であるποίησιςを「秘匿」する。ποίησιςの「秘匿」という事態を、以下の文もまた語っている。

「挑発する開披は、産み出す開披のうちに、その歴運的な由来をもっている。しかし、それと同時に、集立は歴運的にποίησιςをふさいでしまう。」²⁰

さらに、「集立」のうちにひそむ隠蔽性格を、次の文で確かめる。

「集立が支配しているところでは、用象の制御と確保とが、一切の開披を特徴づける。それどころか、この制御と確保とは、それらの固有な根本の特徴つまり開披そのものを、もはや出現させることさえしない。」²¹

「開披」そのものを出現させないこと、これは「集立」が、「真理の現れと支配とをふさぐ」ことにほかならない。かくして、「用立てへと送り届ける歴運は、究極の危険である」とハイデガーは言う。

以上のように、「集立」は「究極の危険」として性格づけられた。しかし、「危険のあるところ、救うものも育つ」というヘルダーリンの詩句を引用して、ハイデガーはこの「危険」のなかに「救うもの」をも同時に見ている。「集立」にひそむこの二重性をハイデガーは次のように述べている。

「一方において、集立は用立てることの狂乱へと挑発する。この用立ては開披という出来事へのあらゆる眼差しをふさぎ、かくして真理の本質への連関を根本から危険にさらす。他方において、集立はそれはそれとして、人間を真理の本質の守護のために必要とされる者（これまで経験されてはいないが、しかしおそらく将来的に経験される）であるということのうちに存続させる、与えるもの (das Gewaehrende) において生起する。かくして、救うものの出現が現れる。」²²

¹⁶ S.19

¹⁷ S.23

¹⁸ S.24

¹⁹ S.27

²⁰ S.30

²¹ S.27

²² S.33

この「集立」の二重性は、ギリシアの τέχνη のそれに重ね合わせて受け取られるべきである。τέχνη、一方において技術であるが、他方において「真理を現れ出るものの輝きへのうちへ産み出す、かの開披」²³、すなわち芸術の ποίησις であった。

6 技術の「自存説」

フィーンバークによるハイデガー解釈をここで取り上げる。彼は、ハイデガーが示した技術論を技術の「自存説」と名づけ、次のように解説している。

「この説は、技術は社会のすべて、世界のすべてを管理の対象として作り替えようとする、ひとつの新しいタイプの文化システムである、と主張する。」²⁴

この「文化システム」は、「情け容赦なく人間に襲いかかってくるもの」であり、したがって、社会全体が「いわば「道具」化を施される」。

要するにこれは、人間をも含んだ一切のものが、技術過程のなかに巻き込まれ、単なる「道具」と化してしまう、ということである。フィーンバーク自身は挙げていないが、たとえば、「人的資源(人材)」なる表現は、なるほどこれを証していると思われる。ハイデガーは以下のように書いている。

「人間が、自然エネルギーを挑発するよう挑発され、用立てられているならば、人間もまた、自然よりももっと根本的に、用象に属してはいないだろうか。人的資源や病院の臨床例についての流行の話し方は、このことを証拠立てている。」²⁵

さてそれでは、このゆゆしき事態に対して我々は、いかにふるまうべきであろうか。この問いは、ハイデガーに従うならば、次のように答えられるとフィーンバークは考える。

「われわれは技術から手を引いてしまう以外、この運命(=社会全体の道具化)を逃れるすべがない、ということだ。もっともただひとつ、伝統やシンプルさを取り戻すことが、そのような進歩

(=テクノロジーの進歩)の怪物の裏をかく手段ではありうるとしても。」²⁶

ハイデガーの議論を以上のように要約するフィーンバーク自身は、もちろん技術=運命(「歴運」)という考えを退ける。そして、彼は技術の「批判理論」なるものを提唱するのだが、その内実に立ち入ることはここでは差し控え、彼のハイデガー批判の要点のみを次に記したいと思う。

7 フィーンバークによるハイデガー批判

フィーンバークがハイデガーにみとる最大の問題は、技術が社会的な文脈から切り離されて、それ自体が「自存」するものと考えられている点である。

「ハイデガーは近代技術を、社会から乖離したもの、純粋な権力を目指す本質的に文脈をもたない力であるとして物象化している。」²⁷

ハイデガー流の近代技術の捉え方に従えば、具体的な技術、たとえば「環境的に健全な技術、人間の自由と尊厳を尊重する医療技術の適用、人間の住空間を創造する都市計画、労働者の健康を守り、彼らの知性を高める機会を提供する生産方法」²⁸が置かれる、広くて多様な文脈を全く無視してしまうことになる。

また、技術の「自存説」は、技術の「決定論」の仮定としてもはたらく。

「決定論は次のような仮定に支えられている。すなわち、諸技術は社会への参照なしに説明されうる、自律的な機能的論理をもつということである。」²⁹

しかし、フィーンバークによれば、「技術の発展もその影響も、ともに本質的に社会的である」³⁰のであり、「社会への参照なしに説明されうる、自律的な機能的論理」など技術には存在しない。

²⁶ 前掲『技術』10ページ

²⁷ Andrew Feenberg: Subversive Rationalization, Technology, Power, Democracy, in Technology and the politics of knowledge, edited by Andrew Feenberg and Alastair Hannay, Indiana University Press, 1995. p.16

²⁸ ibid.

²⁹ ibid. p.5

³⁰ フィーンバーク「民主的な合理化 技術、権力、自由」(『思想』2001年第7号、岩波書店 所収)35ページ

²³ S.34

²⁴ A・フィーンバーク『技術 クリティカル・セオリー』(藤本正文訳、法政大学出版局、1995年)9ページ

²⁵ S.17

したがって、彼の立場はハイデガーとは反対に技術を「自存」するものとは当然見なさない。

第二の問題は、技術的世界に対する人間の対処の仕方について、ハイデガーが提示した答えである。フィーンバークのやや長い言い分を聞いてみよう。

「ハイデガーは、彼のいう技術に対する「自由な関係」の達成によってのみ叙述しうる技術の存在論的な問題と、技術それ自身の変革を願う改革者によって提案されたたんに存在論的な解決とを区別している。(中略)要するに、ハイデガーはまったく同一の技術的世界に対する態度変更以外のことは求めていないのである。それは悪しき意味での観念論的解決であり、環境運動の世代にとっては決定的に論駁するべきものと映るものであろう。」³¹

十分に明らかであるが、あえて要約すれば以下のようになる。ハイデガーは「技術の存在論的な問題」にかかわり、技術との「自由な関係」について語ったが、その主張は人間の「態度変更」ということのみであり、実効力のない「観念論的」な解決策を述べたにすぎない、と。

第三の問題は、上述の「観念論的解決」と結びついている、技術論としても議論の抽象性である。

「ハイデガーの議論は、まさに電気と原爆、農業技術とホロコーストの区別ができない、高度に抽象的なレベルで展開されている。」³²

ハイデガーの議論において、各種の技術が入念に区別もされずに扱われている印象を与えるのは、技術を「機具的、人間学的規定」から切り離して、真理論的な布置のなかで論じているからである。この問題構成によれば、各種の技術は「開披」という点からみられるだけで十分である。あるいはむしろ、ハイデガーの「技術の本質への問い」は、その狙いをはじめから真理の「本質（現成）」の方に置いていたと我々は正しく思い起こすべきであろう。

「技術への問いは、開披と秘匿（Verbergung）とが生起する、つまり真理の現成（das Wesende）

が生起する布置についての問いである。」³³

このように、フィーンバークの第三の論点については、我々は反論をすぐさま投げ返すことができる。次節で第一と第二の問題を吟味する。

8 フィーンバークに対する反論

第一の問題から検討しよう。これはフィーンバークが指摘するように、ハイデガーにおいて技術は社会的な文脈から切り離されて、それ自体が「自存」するものと考えられている。もはやハイデガーの技術論のなかに、「技術と社会の結合」についての分析を求めることはできない。近代技術は人間を「挑発」する、よって「近代技術は単なる人間の行為ではない」のである。

確かに、近代技術という「文化システム」のなかへ人間あるいは社会が、知らず知らずに巻き込まれている事態は、「集立」についての記述によって巧みに表現されている。その一例を次に挙げる。

「森のなかで伐採された木を測定し、見たところ、彼の祖父と同じような仕方と同じ森の道を巡回する山林管理人は、今日、彼がそれを知ろうが知るまいが、木材利用産業によって用立てられている。彼は繊維素の発注可能性によって用立てられ、新聞や写真入りの雑誌のために届けられる紙の需要によって繊維素の方は挑発される。」³⁴

しかし、ハイデガーの場合、そもそも「機具的、人間学的に」技術をとらえてはいない。また、とりわけ近代技術を「歴運」という思考枠のなかで捉えている限り、近代技術の社会的要因なるものへの注視も必要ない。問題構成がこうしたものである限り、フィーンバークのハイデガー批判は不発に終わらざるを得ない。

次に、いかに技術的世界にかかわるかという第二の問題に対する、ハイデガーの示した答えについて、フィーンバークは、それがあまりにも「観念論的」であるとして不満を表明する。しかし本論はそのようには考えない。技術に対して人間がとり結ぶ「自由な関係」こそ、最も実効性のあるものである。すでに言及したように、技術ないし

³¹ 前掲『思想』49ページ

³² ibid.

³³ S.33

³⁴ S.17, 18

は技術的なものの限界を知り、自覚的にこれを経験することが、「集立」として性格づけられる技術の「本質」に逆らわずに対処する方法である(ハイデガーの前提では、そもそも逆らうことはできないが)。したがって、前々節で引いた、「われわれは技術から手を引いてしまう以外、この運命(=社会全体の道具化)を逃れるすべがない」としているフィーンバークの解釈は、ハイデガーの誤解に基づいている。ハイデガーは、技術というものを手を引くべき悪とみなしているわけではない。これを理解しない限り、「危険」と「救うもの」との〈共属の論理〉をも見落としてしまう。

9 「詩人のように」

技術を評価する基準を、我々の生活に「役に立つ」か「役に立たない」かにではなく、人間を「自由」にするか、それとも「束縛」するかという点に求めるとしよう。すると、技術に対する人間の良きかかわりとは、人間を「自由」にするということになる。それでは、人間を「自由」にするかかわりとは、内容からいってどのようなものであろうか。

ハイデガーの議論をそのまま受け継いで考えると、以下のようになるだろう。私たち人間は集立という「究極の危険」のなかにいる。だが、そうした「究極の危険」のなかにいるとは普段気づかない。「人間の行為が直接、この危険に出会うことは決してできない。」³⁵ 私たちが、近代技術のなかに知らず知らずのうちに巻き込まれていることを察知するのは、反省のレヴェルにおいてである。ハイデガーは反省とはいわないで「問う」という言葉を用いるが、人間を「自由」にするかかわりとは、技術に対して「問う」という態度によって得られると考えられる。

技術の「本質」を「問う」ことを通して、「私たちが技術の本質に対応してふさわしく語るならば、技術的なものを、その限界において経験することができる。」³⁶

よって、技術をその限界において経験するとい

うことが、人間を「自由」にするかかわりの内実をなす。

繰り返しになるが、「問う」ことが、技術の渦中に生活する我々が「自由である」ためにとりうる最も稀、かつ困難な態度である。それは、決してフィーンバークがいうような手軽な「観念論的解決」でも単なる「態度変更」でもない。

言うまでもなく、「問う」態度は、現にある技術の全否定を意味するものではない。また、その一方で、技術に対して全肯定してしまうわけでもない。仮に、全否定、全肯定どちらかひとつにだけ加担してしまうなら、その時点で、τέχνηの二重性、すなわち「技術」と同時に「芸術」という「産み出すこと ποίησις」についてのハイデガーの思考を無視してしまうことになる。必要なのは、「問う」ことで二つを同時に見ることである。

「(そして) 芸術はただ τέχνη という名で呼ばれた。芸術は比類のない、しかも多様な開披することであった。芸術は、真理の主宰 (Walten)、および見守ること (Verwahren) に忠実、つまり従順であった。」³⁷

「技術への自由な関係」は、「集立」が「秘匿」する ποίησις へのまなざしを開く。そのとき、我々は「真理の本質の守護のために必要とされる者」として存在する。

「詩人のように、人間はこの大地の上に住まう」³⁸

ハイデガーは、ヘルダーリンの詩句を引き受けつつこのように語る。

注

()は引用者による補い。

ハイデガーの以下の著作からの引用は、ページ数のみ記す Martin Heidegger: Die Technik und die Kehre, Neske, 1996. 9. Aufl.

³⁵ S.34

³⁶ S.5

³⁷ S.34 なお、『芸術作品の起源』中の次の言葉を参照。「芸術の本質は詩作である。詩作の本質は、しかし、真理の創設である。」(Martin Heidegger Gesamtausgabe Bd5 Holzwege, Vittorio Klostermann, 1977, S63)

³⁸ S.35